



共生社会のための精神医学

シドニー・ブロック, スティーブン・A. グリーン, アレクサンダー・ジャンカ, フィリップ・B. ミッチェル, マイケル・ロバートソン 編
 竹島 正 監訳
 神庭重信 翻訳協力
 中央法規出版
 2024年2月 794頁
 本体価格 8,000円+税

本書は、オーストラリアで出版されたシドニー・ブロック他編による『Foundation of Clinical Psychiatry: 4th ed』の、竹島正氏監訳、神庭重信氏翻訳協力による日本語翻訳版である。原著は精神科専門職向けの入門書として四半世紀以上愛用されているテキストであり、前半は精神疾患の原因と治療の倫理的側面についての記述、後半は臨床家が遭遇する精神疾患の全範囲を網羅した内容となっている。日本語タイトルにある共生社会という言葉は原著タイトルにはないものであるが、地域精神保健の発展に長く尽力されてきた竹島氏の、多職種の人々が本書で精神保健と精神医学をバランスよく学び、精神疾患を有する人々が排除されない共生社会を実現してほしい、という気持ちがこめられている。

本書を一読して、通常のテキストに比べてずいぶんとすらすらと読みやすいな、と感じた。豊富な症例が呈示され、それに沿ってわかりやすい精神医学の解説が行われているからであろう。どうしても事典のような構成になってしまう通常のテキストとは一線を画している。そしてこのような本書の特徴がよく示された白眉ともいえるのが、フィンセント・ファン・ゴッホを症例として精神医学的な考察を加えた「精神医学へのアプローチ」の章ではないだろうか。ポスト印象派の画家として「ひまわり」や「夜のカフェテラス」など数多くの名作を残した19世紀を代表する画家であるゴッホは、波瀾万丈の人生を送ったことでも知られており、37歳でその早過ぎる人生を閉じている。本書では、生活歴と家族歴、そして家系図まで追いかけてゴッホの人生を詳細にたどり、仕事や人間関係、パーソナ

リティと彼の精神症状の関係を明らかにする試みを行っている。ゴッホに生じた気分の障害、ゴーギャンとの関係が破綻するなかで起きた耳の切り落とし事件、精神病症状とアルコール飲料アブサンの過剰摂取の関連、そして自殺に至る経過について、精神力動、行動学、社会文化学に至る多面的な分析が行われており、精神医学入門者にとって学ぶことが多い。その一方で、このような詳細な分析を行ってもなおゴッホの心理、行動をすべて明らかにできているとはいえず、精神医学的な理解と説明には限界があることにも触れ、精神医学の奥行きを深さを伝えている。

ゴッホの症例呈示が含まれる第1部では、臨床実践へのアプローチとして、精神疾患とその治療の歴史、精神医学へのアプローチにはじまり、倫理的側面の取り扱い、精神疾患の原因と分類、そして臨床現場で用いられる生物—心理—社会のフレームワークと面接の進め方について述べられている。第2部では、臨床現場でみられる気分症群や不安症群、統合失調症、あるいはより専門的・精神病理学的視点が必要な疾患まで、豊富な症例呈示とともに解説が行われる。第3部では、専門的な臨床領域として、児童思春期、知的発達症を有する人、女性、高齢者にそれぞれ焦点をあてた解説、さらに司法、一般診療、文化との関係性、自殺・自殺行動についても解説が行われている。最後の第4章では、患者に提供する支援に焦点をあて、専門的なメンタルヘルスケアと生物学的治療、精神療法について論じられている。

本書のさらなる特徴として、各章はそれぞれ一流の専門家が集まって訳出を担当しているが、訳者自らが執筆したコラム記事が組み込まれている点が挙げられる。これらのコラムにも多くの示唆が含まれており、本書を一層独創的で魅力的なものへと仕立て上げるのに一役買っている。さらに、本書は神庭氏の翻訳協力のもと、日本精神神経学会によるDSM-5-TR病名訳、ICD-11病名訳案にも、いち早く対応している点もポイントである。本書は精神疾患やメンタルヘルスに関する知識と対応力の向上に資する1冊であり、共生社会の実現をめざす精神科専門職およびその入門者にとって必読の書といえよう。

(中尾智博)